

## 巣立ちヒナの対応について



## はじめに

近年、野生鳥獣においては、人間との何らかの関わりによる傷病が増加してきました。各市町村が野生鳥獣救護センターを設立するようになってきました。野生鳥獣の傷病に対して、皆さんが保護の手を差し伸べるようになってきました。傷病の野生鳥獣に対して治療し、回復させ、自然復帰させることがようやく日本でも行われるようになってきました。しかし、野生鳥獣の保護の実態はというと、その多くは鳥の繁殖期における巣立ちヒナの保護となっています（京都市動物園・野生鳥獣救護センターでは、9割が野鳥であり、その3分の2が幼鳥ということです）。この巣立ちヒナの保護は、実は保護ではなく、救護者の誤った認識から生まれる「誘拐」であり、「間違った保護」であります。このことを皆さんにお知らせする必要性ができてきました。

そこで、(財)日本鳥類保護連盟および(財)日本野鳥の会が、“ヒナを拾わないで”キャンペーンを行っています。私たち京都野鳥の会員や市民の皆さんもそのことを理解し、啓蒙活動をしていかなければならないとおもいます。

しかし、ヒナを拾ってしまったら、保護してしまったら、適切な保護・飼育をして自然復帰できるようにしなければなりません。

そこで、第1章では、「なぜ、ヒナを拾ってはいけないの?」ということについて述べ、第2章では、「では、ヒナを拾ってしまったらどうすればよいの?」ということについて、私の考えを述べさせていただくことにいたします。

京都野鳥の会 三宅 慶一

## 目次

### はじめに

#### 第1章「なぜ、ヒナを拾ってはいけないの？」

- 1．生態系と食物連鎖
- 2．巣立ちヒナの生存率と成鳥の余命
- 3．巣立ちヒナの敵は、人間の構築物と家猫
- 4．巣立ちヒナを拾わないで

#### 第2章「では、ヒナを拾ってしまったらどうすればよいの？」

- 1．鳥の繁殖
- 2．京都市内でよく保護される鳥の繁殖の様子
- 3．巣立ちヒナの保護の理由
- 4．巣立ちヒナを拾ってしまったら
- 5．鳥の食性
- 6．巣立ちヒナにはなにを与えたらよいか（餌の工夫）
- 7．日本古来のスリ餌と九官鳥の餌
- 8．巣立ちヒナの餌
- 9．巣立ちヒナの餌の注意点
- 10 巣立ちヒナの飼育上の注意点

### おわりに

表紙写真：巣立ちヒナたち

上段：ヤマガラ、セグロセキレイ、メジロ

中段：シジュウカラ、ツバメ

下段：キジバト、ヒヨドリ

## 第1章「なぜ、ヒナを拾ってはいけないの？」

### 1. 生態系と食物連鎖

いま目の前に、オオルリが虫をとる場面があります。少し離れたところでオオタカがこのオオルリを狙っています。誰もがこの食べられそうなオオルリに「逃げるように」と危険を知らせたいと思います。しかも、このオオルリにはこの虫をつかまえて巣に持って帰るとかわいいヒナが5羽もいます。この母親が捕食されると5羽のヒナが飢え死にするという事が予測されると、なおさら危険を知らせなければならないと思うことでしょう。

しかし、このオオタカにもヒナが2羽いて、ヒナは空腹で今にも死にそうであると知ったとき、私たちはいったいどうすればよいのでしょうか。

生態系には、巣立ちヒナを捕食しようと狙う高位消費者がたくさんいます(タカ、フクロウ、ヘビ、イタチ、キツネなど)。巣立ちヒナが立派に育ってくれるようにと願いますが、生態系の中にあっては、巣立ちヒナの80%が死亡し、その多くが餌となっていることを認識しなければなりません。

一般的に「植物は唯一生産者、その他の生物は消費者」といわれています。植物やその生産物を昆虫が食べます。その昆虫を小鳥が捕食します。その小鳥を小型猛禽類や小型哺乳類、爬虫類が捕食します。またそれを大型猛禽類が捕食します(その関係を食物連鎖といい、数の関係を図で示したものを生態的ピラミッドといいます)。生態的ピラミッドの頂点にいる動物以外は全て食うか食われるかの関係であり、食われれば「餌」ということになります。小動物や昆虫は全て食べられるためにある「餌」といっても過言ではありません。

生態的ピラミッドの底辺が充実すると頂点は安泰であり、素晴らしい生態系(自然環境の質の高さ、健全さ)が形成されているといえます。生態的ピラミッドの底辺あるいはその中間部が欠けると、その上層部や頂点の存在が危ぶまれます。この生態系・食物連鎖を理解しますと、自然界での動物達の弱肉強食や捕食活動の出来事に対して、人間の感情が介入できなくなるのではないのでしょうか。

例題のオオルリが捕食されて、ヒナが死ぬことは自然の摂理であり、オオルリに逃げられてオオタカのヒナが飢えることも自然の摂理といえます。

## 2. 巣立ちヒナの生存率と成鳥の余命

ある研究報告ですが、「いまここに 100 の卵があるとすると、26%が孵化前に失われ、残り 74 個がヒナとなり、その 30%が死に、残り 52 羽が巣立ちし、第 1 年度にその 80%が死に、残り 10 羽が繁殖した」ということです。

そうすると、100 の卵の親鳥は 20 羽であります（雌雄 2 羽で 5 個の卵を 2 回産むとすると）、 $20（親）+ 10（子）= 30$  羽。毎年鳥の生存数は変わらないとすると、親鳥は 20 羽のうち 10 羽が死亡していることとなります。

あるまとめですが、「結果的には、鳥類全般にみて、卵数の 80～93%が次の繁殖までに死亡し、8～18%が生き残ります。成鳥の死亡率は小鳥、カモ、キジなどで 40～60%、シギ、カモメなどでは 30～40%となる」とあります。

巣立ちヒナがたくさん捕食され、また、成鳥も捕食されます。全て高位消費者の餌となります。弱ったヒナや傷病鳥から先に捕食（淘汰）されていきます。そのために健康な強いものが残り、子孫を残します。

## 3. 巣立ちヒナの敵は、人間の構築物と家猫

巣立ちヒナが一羽でいます。しかしヒナ一羽ではありません。近くに親鳥がいます。いままで育ててくれた親鳥がいるはずですが。親鳥がいなければ、餌を探しに行っているか、他の兄弟に餌を与えているのでしょうか。しばらくすると必ず親鳥が来るはずですが。今まで生きてきたのですからなにも心配することはありません。もし、そのヒナが困っていることがあれば救助をすればよいと思います。たとえば、「溝に落ちて、そこから飛び出せない」、「塀があって塀を飛び越せない」、「自動車にひかれそう」そして「家猫につかまりそう」という場合であります。親鳥が、親鳥の能力で巣立ちヒナを救助できないときだけ、私たちがヒナを救助することにしましょう。救助とはヒナを木の上などの安全な場所に移してあげることです。

注)家猫は、生態系の一員ではありません。飼い主からフードをもらっています。野鳥たちが家猫につかまえられ、殺されることだけは避けたいことでもあります。

余談ですが、歴史的にみて、コロンブスやその当時の航海者・探検者が家猫を新天地に運び込んだため、多くの野生種が絶滅しました。



(家猫が持ち帰ってきたツバメの巣立ち前のヒナとホオジロの巣立ちヒナ。  
ツバメのヒナは巣から落ちたと考えられます。ホオジロのヒナは顔面に咬傷)

#### 4．巣立ちヒナを拾わないで

巣立ちヒナに遭遇したとき、私たちは、“ヒナには親鳥がそばにいるのだ”ということを理解して、どの場面でも、よく観察してよく考えてから必要な救助活動をするようにしましょう。親鳥の存在を考えずに保護して持ち帰ると、それは「誘拐」といわねばなりません。

巣立ちヒナを保護して、親鳥でない人間が飼育することは、「餌のこと」、「飼育環境のこと」、「教育のこと」などの問題がありとても難しいものです。まず餌付けに成功し、発育させ次に、自然のなかで自立できるように、「飛び方」、「餌の捕りかた」、「危険の回避の方法」などを教えなければなりません。それは、私たち人間にとってとても難しいことであります。

保護の成功とは、放野してのち、その個体が自然の中で生き延びていくことであります。放野までに死亡し、あるいは放野できない健康状態になれば、結果的には餌を廃棄処分したことになり、その代償として、健康体のヒナや小鳥が餌となって命を奪われてしまうかもしれません。また、たとえ放野することができたとしても、この鳥が自然の中で自立できなければ、「餌になってきなさいよー」といって放したことにすぎないことを認識しなければなりません。

以上のことから、巣立ちヒナに対しての対応は、成功の確率が少ない「持ち帰り保護」よりも、危なっかしい巣立ちヒナではありますが、親鳥に全てを任せて、「持ち帰らない、その場における救助活動」が最もよい方法と思われます。すなわち「ヒナを拾わないで」であります。もし、持ち帰らなかったために巣立ち

ヒナが悲惨な結果になったとしても、そのことは生態系の全体のことを考えるとごく普通の出来事であります。



(ホオジロの放野)



(ツバメの放野)



(セグロセキレイの放野)

## 第2章「では、ヒナを拾ってしまったらどうすればよいの？」

### 1. 鳥の繁殖

巣造り、産卵、抱卵、育雛(いくすう)と巣立ち後の子育て、教育期間については、一般的にいて、巣造りは約1週間、産卵期間は約1週間、抱卵期間は約2週間、巣での育雛期間(巣立ち日数)は、枝巣の場合約2週間、洞巣の場合約3週間、巣立ち後の子育ては約2週間かかります(洞巣の小鳥の場合は少し短いだろうし、大型種はもう少し長くなるでしょう)。すると、1繁殖についての全期間は短くても合計約2ヵ月かかることになり、1シーズンに2回の繁殖は十分可能ですが、3回を成功させることは非常に困難となります。繁殖途中で何かの理由で巣の放棄や破壊があった場合、それを1回とすると、3回目を営巣することがあるかもしれません。

## 2. 京都市内でよく保護される鳥の繁殖の様子

	産卵期	卵数	抱卵日数	巣立ち日数
メジロ	5月～6月頃	4～5	11～12	11～13
シジュウカラ	4月～7月頃	7～10	12～13	16～20
スズメ	2月～9月頃	4～8	12～14 (13～14、*20～22)	
ヒヨドリ	5月～6月頃	3～5	13～14	10～11
ムクドリ	3月下旬～7月頃	4～9	11～12	21
ツバメ	4月下旬～7月下旬	3～7	13～18	20～24
キジバト	4月～6月(～10月)	2	15～16	15～16
ドバト	ほぼ1年中	2	16	28～35
ハジボソガラス	3月下旬～6月下旬	3～5	19～20	30～35

\*) このデータは、「校庭の野鳥 唐沢孝一著」から引用したもので、他全ては、「日本鳥類大図鑑 清棲幸保著」より引用しました。あまりに違うデータなので紹介しました。私は20～22の方を支持したいとおもいます。

## 3. 巣立ちヒナの保護の理由

メジロは巣立ち直後の幼い雛が運悪く地上に降りたとき、上手に飛べないので、弱っているとおもわれて保護されてくるようです。見るからにひ弱であり、また、この上なくかわいいのです。助けざるを得ないということです。

ヒヨドリは非常に早い段階で巣立ちますが(巣立ち日数10～11日)、巣の周辺で徐々に成長していきます。もし、巣より落ちたヒナがいても決して巣に戻そうとははいけません。巣に近づくと残っているヒナ全てが飛び出してしまう結果となります。羽が十分生えそろっていないくて、まだうまく飛べない巣立ち直後のヒナがよく保護されますが、発育不十分のため、飼育が難しく失敗例(発育不良)が獣医院や救護センターによく持ち込まれます。

ツバメは巣立つと、休むことなくほとんど飛翔しなければならないので十分に発育してから巣立ちます。(巣立ち日数20～24日)。巣立ち前に巣から落ちたヒナは巣に戻すこともできますが、また落ちる可能性が大きいので保護したほうが



よいこともあります。保護された巣立ちヒナは飛翔中の事故とおもわれ、脳震盪や翼を損傷していることが多いようです。また、長雨による餌の採食不足による衰弱もあるようです。

同様に洞巢の鳥（シジュウカラ、スズメ、ムクドリ、ドバトなど）の場合も、洞巢から飛び出せる飛翔力がつくほど十分に発育していますので、保護された巣立ちヒナは比較的元気で丈夫であります。猫に捕まえられての保護が多いようです。ヒナが無傷であれば、保護と言うより誘拐とおもわれることが多いようです。スズメの場合、まだ十分に羽がはえそっていないヒナがよく保護されますが、それは巣立ったのではなく巣から落ちたものであります。ヒナの健康状態が悪いものがほとんどで、育てることは非常に困難であります。

キジバトのヒナの発育はとても早くすぐに巣立ちます（巣立ち日数 15～16 日）。巣や枝から落ちたものがよく保護されます。身体が大きいだけで弱々しく動きがにぶいものです。体重があるので脚の損傷が認められるものが多いようです。親鳥が事故や天敵に殺されたりして孤児となり、採食不足となつての衰弱保護も多いとおもわれます。また保護ヒナに対する餌があわず、栄養失調になつて衰弱してから獣医院や救護センターに持ち込まれることが多いようです。

ドバトは巣立ち後、十分に採餌できず栄養不足でフラフラになつたものが長雨の後などによく保護されます。

カラスは十分に羽がそろっても、体が発育して大きくなつてもなかなか巣立ちません（巣立ち日数 30～35 日）。誤つて枝を踏みはずして落ちて保護されることがあるようです。

#### 4．巣立ちヒナを拾ってしまったら

保護されたヒナは、まず身体検査をしなければなりません。ヒナの体が濡れていれば乾かし、体が冷えていれば保温します。翼が垂れていないか、脚が曲がっていないかを確認します（骨折の有無）。脚の跛行と異常な動きの有無を調べます（関節障害の確認）。もし異常があれば、野生鳥獣指定獣医師か動物園獣医師に相談します。しかし、いろいろなことに時間を取りすぎてはいけません。巣立ちヒナの保護の場合、一番大事なことは、まず餌を与えなければならないことあります。

保護された巣立ちヒナの入れ物は、当初はダンボールの箱や小さなプラスチック水槽がよいでしょう。ヒナがバタバタと暴れたとき、鳥かごでは風切羽や尾羽を損傷する危険性があります。

保護された巣立ちヒナを人間が子育てすることはとても大変なことでありますが、巣立ちヒナの発育からすると、一般的に言って約2週間育てれば、ひとりで餌が食べられるようになります。それまでは、小型種(メジロ、シジュウカラ、スズメ、ツバメ)は1時間に1回以上、中型種(ムクドリ、ヒヨドリ)は2時間に1回以上、大型種(ハト、カラス)は3～5時間に1回以上、朝から晩まで餌を与えなければなりません。巣立ちヒナを保護したときは、このことを覚悟しなければなりません。



巣立ち雛が受傷しておらず、元気であれば、すべて誘拐となります。

(上段 左：メジロ 中：ヤマガラ 右：スズメ)

(下段 左：シジュウカラ 中：セグロセキレイ 右：ヒヨドリ)

巣立ち前のヒナが巣から落ちた場合や怪我のある巣立ちヒナの場合は、親鳥はヒナを助けることはできません。この場合はヒナを保護しなければなりません。人間が助けなければ必ず死が訪れるからです。ツバメとスズメのヒナの場合、巣から落ちた巣立ち前のヒナが保護されることが多いようですし、キジバトの巣立ちヒナは受傷していることが多いようです。



(左：巣立ち前に巣から落ちたツバメのヒナ と 右：スズメのヒナ 保護)



(左：巣立ち直後、地上に落ちて飛び上がれないツバメの巣立ちヒナ 保護)

(右：脚の骨折で救助されたムクドリの幼鳥 保護)



(左：ガラスに頭部を打ちつけ脳障害をおこし、飛べないスズメの幼鳥 保護)

(右：カラスに襲われて受傷したキジバトのヒナ。ソノウを縫合手術。 保護)

## 5．鳥の食性について

ヒナの命を救うにはヒナを育てる飼育技術がどうしても必要となります。

巣立ちヒナを飼育するためには、まず、鳥の食性を知らなければなりません。

- ・メジロ：動物質はクモや小昆虫（卵、幼虫、成虫）を食べ、植物質では花の蜜を吸い、果実や漿果などを食べます。餌台ではミカンが好物です。
- ・シジュウカラ：動物質はクモや昆虫（幼虫や成虫）を食べ、植物質では木の実やマツの種子などを食べます。餌台ではヒマワリの種子、麻の実、菓子などを好んで食べます。
- ・スズメ：主として植物質が餌であります。夏季は小昆虫（幼虫や成虫）を食べます。植物質は雑草の種子やアワ、ヒエ、イネの農作物。餌台では菓子やパンなど何でも食べる雑食性であります。
- ・ヒヨドリ：夏季は昆虫や小動物を食べますが、果実、漿果、花蜜、パンなど何でも食べる雑食性であります。冬季は植物質がほとんどで、果実や漿果を食べ、餌台の常連で菓子、砂糖水やジュースなどを好みます。
- ・ムクドリ：動物質は昆虫を最も好んで食べますが、カエル、トカゲなどの小動物まで食べます。植物質では色々な果実や漿果を食べます。育雛にサクランボを与えることもあります。ムクドリの名の由来はムクノキの実を好んで食べるからです。
- ・ツバメ：飛翔している昆虫を捕食します。トンボ、ミツバチ、アブ、カゲロウ、カワゲラ、メイガ、羽アリなど。ネオン街では夜間に採餌することもあります。
- ・キジバト、ドバト：主に植物質。雑草や木の種子、果実や漿果を食べます。動物質も少しは食べます。昆虫（幼虫）、マイマイ、ミミズなどを食べることもあります。
- ・ハシボソガラス：雑食性で、動物質はネズミ、カエル、魚、小鳥（卵、雛）や昆虫、また動物の死体までも食べます。植物質では農作物、果実、漿果や種子を食べます。ごみ箱の残飯も食べる雑食性です。

## 6．巣立ちヒナには何を与えたらよいか（餌の工夫）

- ・昆虫の代替は、ミルワーム（幼虫、サナギや成虫）、サシムシ（幼虫のほかサナギや成虫になったハエ）、コオロギ。

- ・小動物（たとえば、トカゲやカエル）の代替は、ニワトリの肉や肝臓。
- ・雑草や樹木の種子の代替は、アワ、ヒエなどの小鳥の餌、麻の実、ヒマワリの種、ピーナッツ。
- ・樹木の実や漿果の代替は、トマト、バナナ、サクランボ、ミカン、干しブドウ、ゆでたスイートコーン、ゆでたグリーンピース。
- ・手軽で簡単、栄養豊富な食べ物は、ゆで卵黄。
- ・獣医院で手に入る高栄養食品、Hills の特別療法食 a/d 缶（半流動食です）。
- ・雑食性の鳥に対しては、カステラ、バームクーヘン、ビスケット、エイセイボウロ、オレンジジュース、チーズ、ドッグフードなどもよいでしょう。
- ・基本食としては、スリ餌（5分か6分）、または九官鳥の餌。

注）「ミルワーム」とは、チャイロコメノゴミムシダマシという甲虫の幼虫です。最近は多くの小鳥屋さんで販売しています。サシムシは釣具店で購入できます。コオロギはペットショップで購入できます。



（褐色のミルワームを与えるところ 左：コガラの幼鳥、右：ホオジロの幼鳥）

## 7．日本古来のスリ餌と九官鳥の餌

### ・スリ餌の材料

- 1) 上餌（うわえ）：生米糠、玄米粉、大豆粉、小麦粉
- 2) 下餌（したえ）：川魚であって地方によって種類が異なります。  
ハヤ、フナ、ドジョウ、ウナギなどを乾燥させて粉にしたものです。一般にフナ粉を用います。煮干も使用できます。
- 3) 緑餌：コマツナ、ダイコン菜が最も適当とされていますが、カブラの葉、

ホウレンソウ、カラシ菜、毒草を除き人間の食用とする青菜であれば与えることができます。

- ・スリ餌の配合割合：上餌は、糠 1 升(約 675g)に対して、玄米粉 3 合(約 225g)、大豆粉 2 合(約 150g)配合したもの。これを百匁(375g)に対して魚粉 30 匁(約 113g)を加えたものが 3 分餌。魚粉 50 匁(約 188g)加えたものを 5 分餌といいます。

多くの巣立ちヒナは、5～6分餌でよいでしょう。メジロの成鳥は3～4分餌となります。

スリ鉢ですった青菜を青みのつく程度にスリ餌に混ぜてつくります。

柔らかさは「耳たぶ」ぐらいの柔らかさです。

冬季は、朝に作った餌は夜まで腐敗しませんが、夏季は、昼に1回餌を作り変えなければなりません。スリ餌はすぐに腐敗することが欠点です。

また、スリ餌を粒状に加工されたものが市販されています。ひとりで餌を食べることができるほどに成長したのものには乾燥の状態でも与えることもできます。通常は水を加えます。乾燥状態の粒餌は腐敗しないことが最大の利点です。



(メジロ用とシジュウカラ用のスリ餌) (メジロ用の粒餌、オオルリ用もある)

- ・九官鳥の餌について

成分は5分餌程度。水を加えて柔らかくしたものをヒナの口の大きさにあわせ、小さく分割して与えます。バサバサやドロドロになりにくく、スリ餌より腐敗が遅いことが利点です。それでも夏季は水を加えたものは1日1回作り変えます。成鳥には乾燥状態で与えることもできますが、通常は水を加え、ふやかさなければなりません。

## 8．巣立ちヒナの餌について

- ・メジロ：スリ餌または九官鳥の餌、ミルワーム、ゆで卵黄、カステラ、バナナ
- ・シジュウカラ：スリ餌または九官鳥の餌、ミルワーム、ゆで卵黄、ピーナッツ
- ・スズメ：スリ餌または九官鳥の餌、ミルワーム、ゆで卵黄、ビスケット、ムキアワ
- ・ヒヨドリ：スリ餌または九官鳥の餌、ミルワーム、コオロギ、ゆで卵黄、カステラ、鳥肉、鳥肝、トマト、バナナ、ホシブドウなどと総合ビタミン剤の添加
- ・ムクドリ：スリ餌または九官鳥の餌、ゆで卵黄、ミルワーム、コオロギ、カステラ、ホシブドウ、サクランボなど
- ・ツバメ：スリ餌または九官鳥の餌、ミルワーム、コオロギ、ゆで卵黄、鳥肝、総合ビタミン剤の添加
- ・キジバト：スリ餌または九官鳥の餌、ゆでたグリーンピース、ゆでたスイートコーン、豆乳、大豆蛋白でできた乳児用粉ミルク（商品名：ボンラクト）
- ・ドバト：キジバトと同様ですが、パン、ビスケット、ハトの餌なども
- ・ハシボソガラス：ゆで卵黄、鳥肉、鳥肝、魚肉、ドッグフード、ビスケット

## 9．巣立ちヒナの餌の注意点

- ・スリ餌：感触を「耳たぶ」ほどの柔らかさに練ること。小さな団子にして与えてもよい。夏季は腐敗しやすいので注意をします。何回もにおいて正常な「におい」を覚えることです。腐敗すると、すーい独特のにおいとなります。



(左：粒状のスリ餌を水でふやかしてツバメのヒナに与えているところ)

(右：5分餌を水で練ってセグロセキレイの巣立ちヒナに与えているところ)

- ・九官鳥の餌：十分に水を吸収しているが、少しつまんでも水が滴りおちない程度にふやかします。細かく裂いて口腔内に差し込みます。形が崩れるものは古く、腐敗の危険性があります。
- ・ミルワーム、サシムシ：この二つの幼虫は、販売時冷蔵保存され発育を停止させられていますが、ヒナに与える場合は、室温にて発育を促し脱皮・成長させ、白い柔らかい幼虫を選ぶことです（サシムシは脱皮しない）。またサナギや成虫も、なるべく白い柔らかいものを選んで与えます。幼虫を与えるときは、残酷な行為ではありますが、必ず殺してから与えるようにします。

注意) ミルワーム・サシムシについての注意事項

- ・ミルワームを多給すると栄養障害を起こし、眼が腫れてきて衰弱します。
- ・ミルワームの餌がフスマであると、フスマに含まれているフィチン酸は有害となる恐れがあるので長期投与はできません。
- ・ミルワームやサシ虫の外骨格がキチン質であるため比較的消化しにくいといわれています。巣立ち直後のヒナや衰弱している鳥には与えないほうがよいでしょう。
- ・サシムシはハエに成長させてから与えることをお勧めします。



（左：セグロセキレイの保護直後の巣立ちヒナに、脱皮直後の白くてやわらかいミルワームを与えるところ）

（中：スズメのヒナにミルワームのサナギを、右：脱皮直後の白くて柔らかいミルワームの成虫を与えるところ）

生きた虫の取り扱いの苦手な人は、最近、ペットショップでコオロギ、ミルワームやその他の幼虫類の缶詰が購入できますのでそれをご利用ください。





(ミルワームの缶詰)



(トガリバナセセリ幼虫の缶詰)



(ココロギの缶詰)



(左：ココロギの缶詰を食べるヒヨドリの巣立ちヒナ と 中：セグロセキレイの幼鳥 右：トガリバナナセセリの幼虫の缶詰を食べるヤマガラの幼鳥)



(左：トガリバナナセセリの幼虫の缶詰は細かく切り刻むことができます。巣立ちヒナは、少し成長すると大口を開けなくなり、大きな虫をそのままでは食べなくなります。中：トガリバナナセセリの幼虫の缶詰の細切れを食べるメジロのヒナ と 右：シジユウカラのヒナ)

- ・ゆで卵黄：バサバサにならないようにします。また喉を詰めないように少量ずつ与えます。
- ・トマト、バナナ：果肉を細かく切って与えます。
- ・ホシブドウ：一晩水に浸し、ふやかしたものを与えます。
- ・鳥肉、鳥肝：新鮮なもの（生）を小さく切って与えます。ゆでたものをすり身の団子にして与えてもよいでしょう。
- ・ビスケット：砕いて、水で練って、団子にして与えます。カルシウムを添加したビスケットが市販されています（たとえば商品名：カルケット）。
- ・キジバトの餌の場合：すり餌を豆乳で練ると「ねばり」ができて団子をつくりやすくなり、投与が簡単になります。この団子はヒナの口をあけての強制給与もできます。



（すり餌を豆乳で練り、団子にしてキジバトのヒナに与えているところ）

#### 10．巣立ちヒナの飼育上の注意点

- ・鳥類用の総合ビタミン剤がペットショップで販売されています。それをご利用ください（商品名：たとえばネクトンS、ネクトンB I Oなど）。ヒヨドリやツバメの巣立ちヒナには必ず与えるようにします。

ビタミン剤の入手困難なときは獣医師に相談してください。

- ・ヒナが口を開けるあいだは、餌を食べるだけ与えます。食べ過ぎの危険性より餌不足の危険性のほうが大きいようです。



(市販されている鳥類用のビタミン剤の粉末です。左からビタミン D とカルシウム複合剤、総合ビタミン剤、羽毛発育促進用ビタミン複合剤、ビタミン B 複合剤、ビタミン K 複合剤)

- ・スポイトやスプーンなどで水を巣立ちヒナに与えてはいけません。ヒナは今まで、水を飲んだことがありません。口を大きく開けたときにスポイトやスプーンなどで水を投与すると気管に入る危険性があります。水分給与の調節は、糞の状態を見ながら餌の水分含量を調節します。脱水でどうしても水分が必要なときは、クチバシを閉じているときに、ストローを用いてクチバシに水をしみ込ませたり、クチバシの先端を容器に入った飲み物につけたりします。

ヒナが口を開けなくなり、餌をついばみ始めると、自分で水を飲むようになります。



(左:セグロセキレイの巣立ちヒナ 細いストローのようなものに水またはブドウ糖液などを入れて、ヒナの閉じているクチバシの先端に当てているところ)  
(右:キジバトのヒナ クチバシを豆乳につけて自らの力で飲ませているところ)

- ・そのうち、ひとりで餌を食べるようになりますが、食べるからといって安心してはいけません。しばらくのあいだ、1日に何回か差し餌をしなければなりません。

### おわりに

数年前からの、(財)日本鳥類保護連盟および(財)日本野鳥の会の「ヒナを拾わないで」キャンペーンのおかげで、このことは皆さんに理解されつつあるとおもっています。ヒナを拾うことは簡単なことであります。しかし、それを育てあげ、放野することはとても大変なことであります。ヒナを拾うことではなくて、すこし様子を見て、ヒナを救助する必要があるときは、たとえば木の枝に置いてあげるぐらいのことにとどめ、あとは自然の摂理にまかせることがよいのではとおもっています。

しかし、理由はともかく、保護されてしまったヒナに対しては、保護マニュアル、飼育マニュアルが確立されれば、今まで以上に保護されたヒナの生存率は高まり、放野率も高まるのではないのでしょうか。やっとなら私達には、可愛そうなヒナを見つけたとき、そのヒナを保護しようという気持ちが芽生えてきたのです。ヒナを「拾うな」、「元に戻しなさい」だけではなく、保護しようという気持ちも大切にしたいとおもっております。

この「巣立ちヒナの対応について」の小冊子が、巣立ちヒナを「拾わない」、「拾う」にしても、ヒナの命を救う一助になってもらえれば、愛鳥家としてとてもうれしいことでもあります。

### 参考図書

- |                  |           |              |       |
|------------------|-----------|--------------|-------|
| 鳥類の研究(生態)        | 黒田長久著     | 日本鳥類大図鑑      | 清棲幸保著 |
| 目白とうぐいす          | 深川景義著     | 校庭の野鳥        | 唐沢孝一著 |
| 「図解雑学」生態系        | 児玉浩憲著     | ぼろぼろになったひよどり | 石部虎二著 |
| バード・クリニック・プラクティス | B.H.コールズ著 |              |       |